鶴さゝ物

シテ詞
か様に候者ハ鞍馬の奥僧正か
谷に住居する客僧にて候扨も
當山におゐて花見乃よし承及
候間立越遠所なから梢をも詠
はやと存候　シカヽ〽是免くるまて承候
さるほとの人申者いはざれとも
當山にをいて毎年ハ花見人の

御座る殊に尚重ねて一順と見る事
まゐらせ候る東谷へ唯今文を
持て参らばやいかに案内申し候西谷
より御使に参りて候文の
御座候披見候へ

ワキ詞

なかく
西谷乃花ハ今を盛となりて候に
など御音信もなからせらるゝ一筆

上カヽル

殊上さしめん古哥にいはく
げふみずはくやしからまし
花盛

詞

咲も残らず散もはじめず

上カヽル

げにやおもしろき哥の心ばせ音信
なくとてもこなたより参るべき候
へ義よ

上哥

花咲大告せといひし
山里乃ッぐ使者来て馬よくら

鞍馬の山のうず桜手折枝折を
しるべにて奥もまよはじ咲
つゞく木陰に並居ていざ
ゝ花をながめん　いかに申候は
あれに客僧の渡り候が是は
狼藉成者にて候程に追立うずる
にて候　ワキ詞　しばらく候へかゝり

此座敷と申すは源平両家の
童形達の為は座敷の御やう子
かゝる人をへそれはどもれとも
みうやまふ中々人を撰び
中にかゝる客なを候間月さう
候狼藉人　客僧出でゝ侍るを候
候ゝまかり出しふみのうずしては

ヲカヽ
いやくそれのはなさけまちへんかを
ばあおき梅をさつゝ角ふける
まろは
いま詞
いやくたゝ浮たち
あしふけるまそんいるうふ
三下サニ
人家をさそて花あまたひありち
いはなかきさんしおかと我
さまみまんぬをさうぞ寿おあひも

ゆもなき浮世よ壺きくうま寺
ばなは大火多つ天きつひよも秋
たる人となる
牛ゐ上
実やむの本乃
半月の本月おもへ乃一あは本
詞
ごう悲さんよしみえたき悲なぜ痛
りーやをうよまてもほ悲くん
三下詞
思ひゆるいのや松虫の音かうよ

えぬ深山桜を尋ねつゝひ乃
古郷となる此山よ　あるかの一花なり
志ら雲深き立まじりつゝ来る旅人
門し　誰をかも志る人にせん
高砂乃　松も昔し　濃友も
うらみの浪わひのさゝ
まくやずさと此葉志ら々窓雁乃

花をな捨てそ迴ほの梅枝より
花紅葉なまめかる三秋乃錦あるの
びとり　一本をなおさめれば
憐かなしんまつるよ心寛よ
紅葉のながれたまてゝこひの
乃きら母気やーさくよ　川るま
中ば晴々の児たちハみ眺く

此悔によれば只一人児にて
候座らう　ウミ　さらんの呪はの児
是ハ貴家乃一つ中にも出藝当
清盛り子とかるにより一寺乃
下カル
学数他山におか文時に施すたり
がん流りしも同山ま法人弟
面白もなき寺也まつ月にも花

三字詰
悉痛はしや
又も捨し捨てて人
ほさりのふわ上臈ハ常想服よ
三男児汝つ乃汝の字をうさ麻
下カル
御しみなも汝児主殿と代参中
ぎめうてはしやはかなさきは
中　下カル　下　高
所もくうまれ信の月　見隠
人もなき山里の桜花よりの数

下

なんぼまちうざのは咲へきに
荒痛りしのはすや松風も殊
袖とひでぐ雪と時雨と古わ
哀勝雲よそりんで其勝を断と
うやむ心ほうは気色やゆなを残し
むかしあふわ逢ハきこえてよう
外の松奥ハ鞍馬乃山路の花う

京へ都さへ入を妙へや
梅も咲雁清待しそこ初清記
名所のあたり時ハあさこ言旅乃
初桜ばさらや横川乃あり横者聖
初瀬乃名とくろなぞん残り市も
あらたきう去まそもいうり成
人はまし乃増ある都をなくさめ

御ふしんはれぬをあのわおりし
今は何をか包むべき
我此山に年経たる大天狗は
我なり　君兵法の大事を伝へ
平家をほろぼし給ふべきなり
さもおぼしめさば明日参会
申すべしさらばといひて客僧は

大僧正が谷を分て雲をふんで
飛んで立雲をふむでとんで行
さても沙那王のいでたちには
はだへにはうすはな桜の一重に
けんもんしやの直垂の露を
むすんで肩にかけ白糸の腹巻
白柄の長刀
譬へば天魔鬼神

あわれぎまり嵐の山桜花やり
成り候出立ぬ　抑是ハ鞍馬乃
奥僧正が谷に年経て住める
大天狗なり　先御供の天狗ハ
誰々ぞ筑紫ハ彦山の
豊前坊　四州ハ白峯の
相模坊大山乃伯耆坊　飯綱乃

三郎富士太郎大峯の前鬼が
一党葛城高間よそまでもあるまじ
邊土においては比良　横川
如意が嶽我慢高雄の峯に
住んで人のためには愛宕山
霞とたなびき雲となって　月は
鞍馬の僧正が谷に満ち満ち峯を

うこし荒木枯淡のなと天狗
たなしおかひたゝしやいるよ
御郷主とのたゝいか小天狗を
気つをそへ小稽古乃きさえとれ
なんほう清こ物うそうさ愛は
陰ゝ小天狗とも東里にほとに
ゞうにまなも物付稽古のき八哉

こ物中たくみに人清き氏御匠
まつ也志しし神中さへ光おりひ
とまわてはあるいとゆふ
ここ詞
人やざやうに御匠を大事よ
おかしーめは天ー徳井富ざきる
物語のゝ語清てやせやよ庵し
相も守祖乃存下張らといふ老

貞石公より此一大事をお傳へ
ある時馬上にて行あひたまひしに
なにとかしたりけん左の沓を
おとしいかに張良あれ取て
りはかせよといふ安からずハ
思ひしかとも沓をとつてまいらせ
又其後以前のごとく馬上にて

詞

行逢ひたまひしに此度ハ左右の沓
を落しやあいかに張良あの沓
取てはかせよといふ猶安からずハ
思ひしかどもよしよし此一大事を
お傳へある上ハと思ひ落たる沓
を取とはかせ張良沓をさゝけ
つゝくるの上黄石公よりさ

幼きよりこそ兵法の奥儀を

たゞん乃為それもとむる

わけ上るもくらまの花やかなる

僧正ヶ谷も峰も荒天狗を

師匠や坊主とて崇敬ハいつまでも

大事を残さず授へて平家を

うらん心と思召のやさしき乃

心猛屋に様武略乃かまびすしき

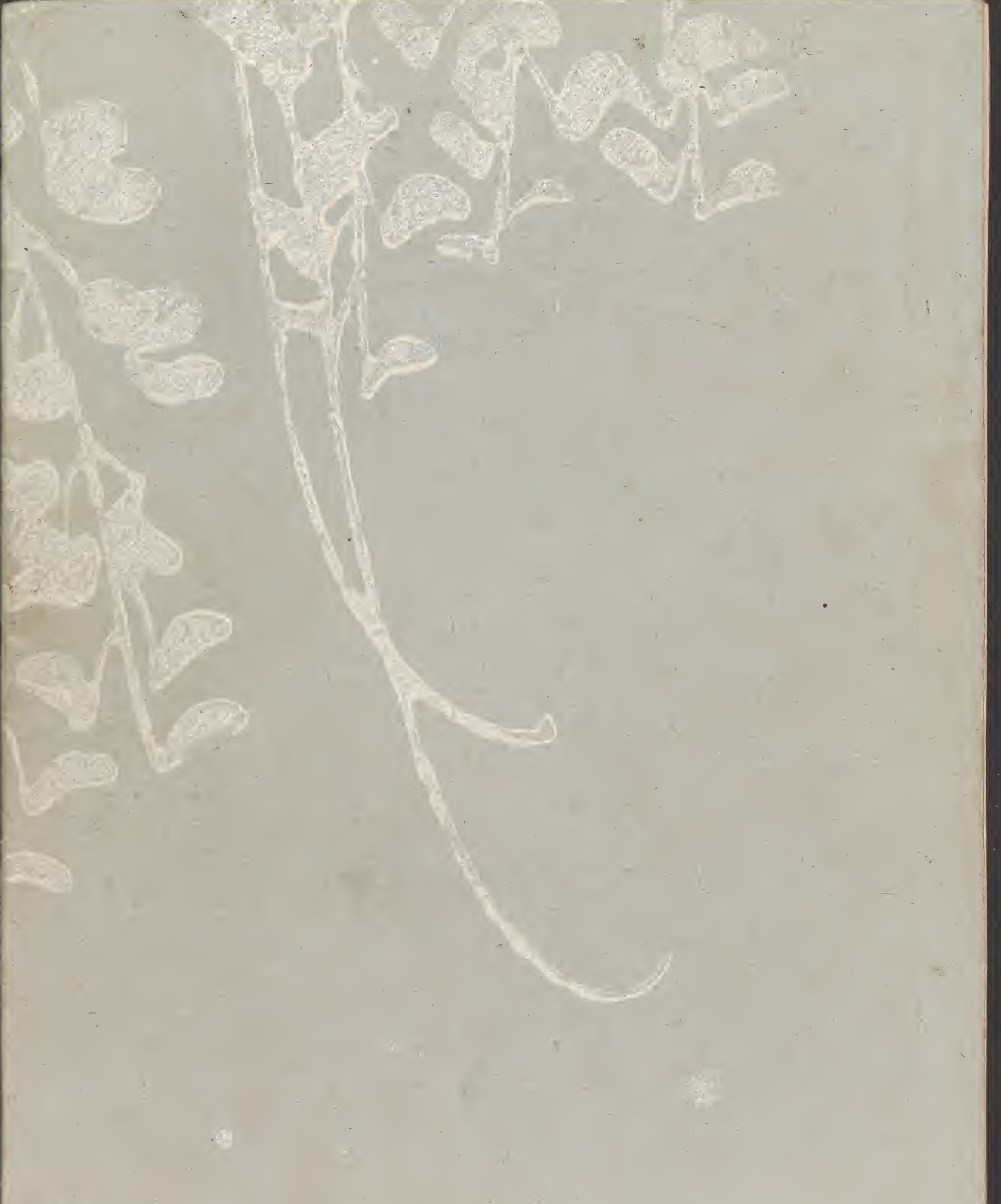
さゞく源平藤橘四家よりも敢に

ほ家乃三郎かう人え清和天皇の

後胤としてあらく時節を

の気うん来海に参来候平家を

西海に追落したし蒼波滄波の

浮雲に飛行の身亡を子の巻了

欲をゐいふれ志勢をはくらむ
情力ときも依應しよとなわや
情雕中て立の人またば半名族よ
はるゝ中人ま実名残ありの西海
四海乃名戦といふとも勇哉
離まはゝ矢れ力を湯る應し
通めやたのめ的はふの老膳き
ご落めや都めと述ふのけくら
ま乃楮よこの老律てう路よろわ